



1

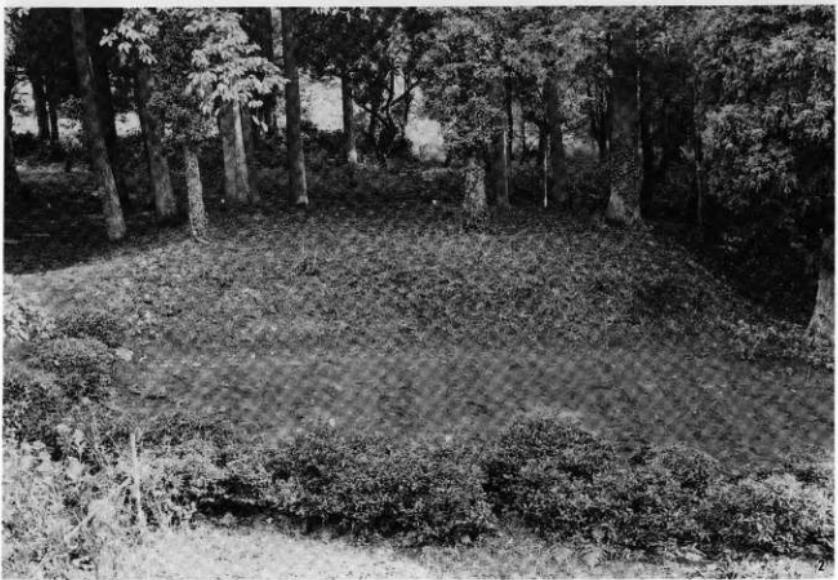
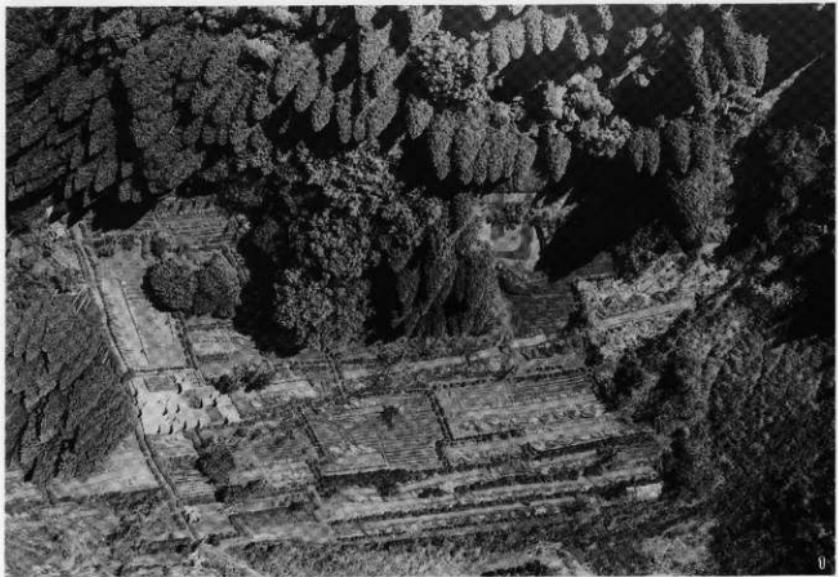


2

図版 8 1. B地区全景（南より） 2.（伝）榎太夫の墓全景（東より）



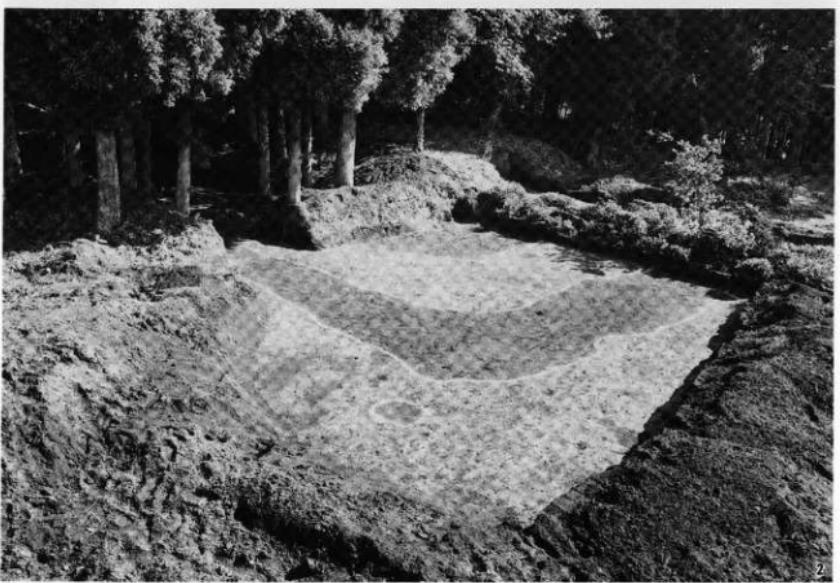
図版 9 1. (伝) 権太夫の墓石造物群 (南西より) 2. 93トレンチ全景 (北東より) 3. 同上19 (北東より)  
4. 同上20 (東より)



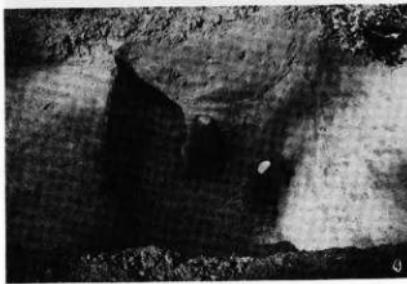
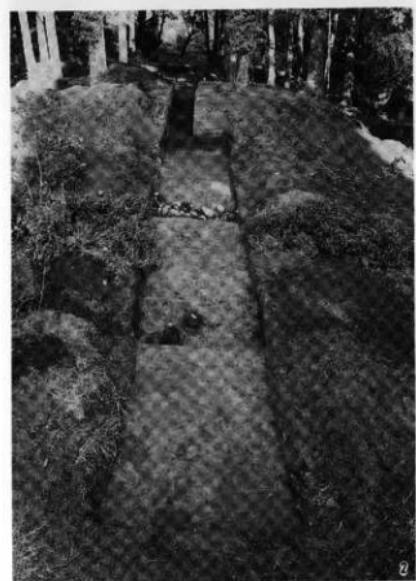
図版10 1. C地区全景（西より） 2.（伝）行人塚発掘前全景（南より）



図版11 (伝) 行人塚61トレンチ全景 (東より)



図版12 1. (伝) 行人塚61トレンチ西端縫出土状況（北より） 2. 同65トレンチ周溝発掘前全景（南西より）



図版13 1. (伝) 行人塚65トレンチ周溝発掘後全景 (南西より) 2. 同62トレンチ全景 (南より)

3. 同内側周溝縁出土状況 (西より)

4. 同外側周溝と土層 (西より)



1



2



3



4



5

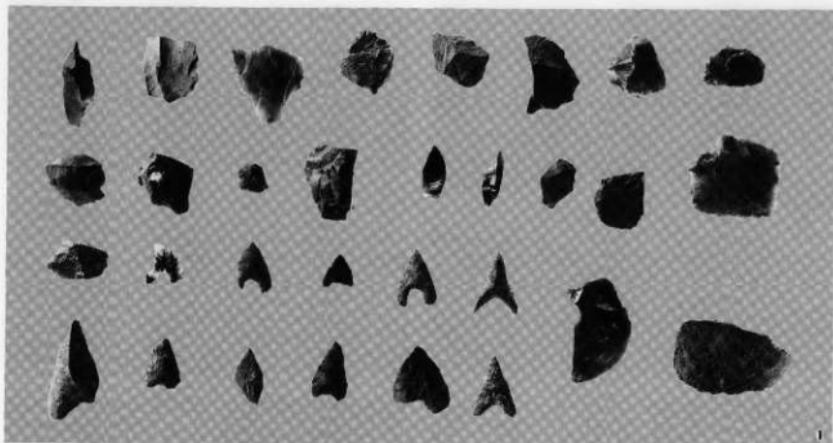


6

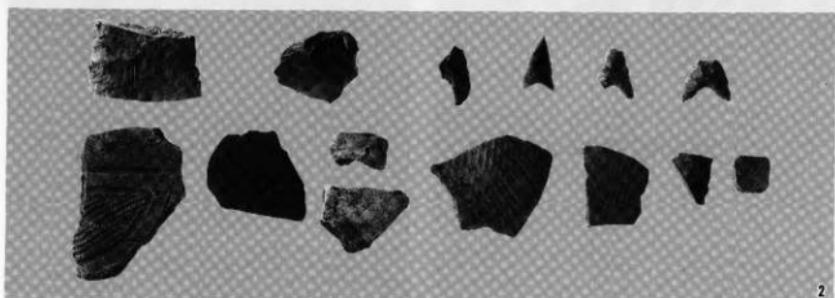
図版14 1. (伝)行人塚64トレンチ全景 (西より) 2. 同内側周溝露出状況 (北より)  
4. 同マウンド東端盛土状況 5. 同マウンド北端盛土状況 6. 同作業状況



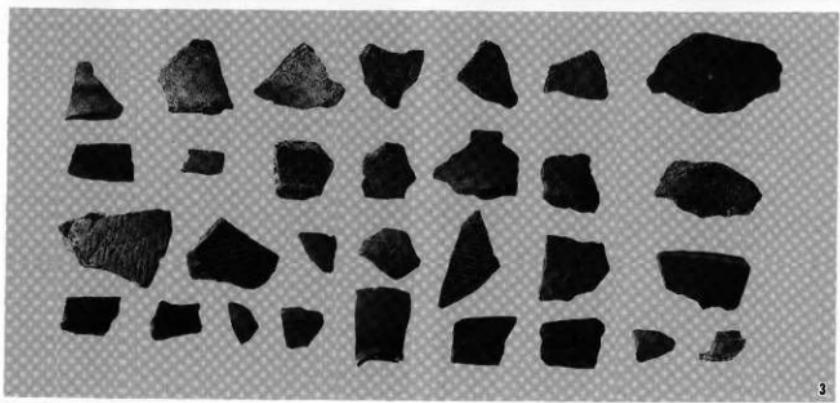
図版15 1. D地区テラス状遺構全景（北東より） 2. 同（南西より） 3. H地区（伝）天児六郎屋敷跡テラス  
状遺構全景（東より） 4. 同（南西より） 5. 同石積みの状況 6. 同テラス状遺構入口部（南東より）



1

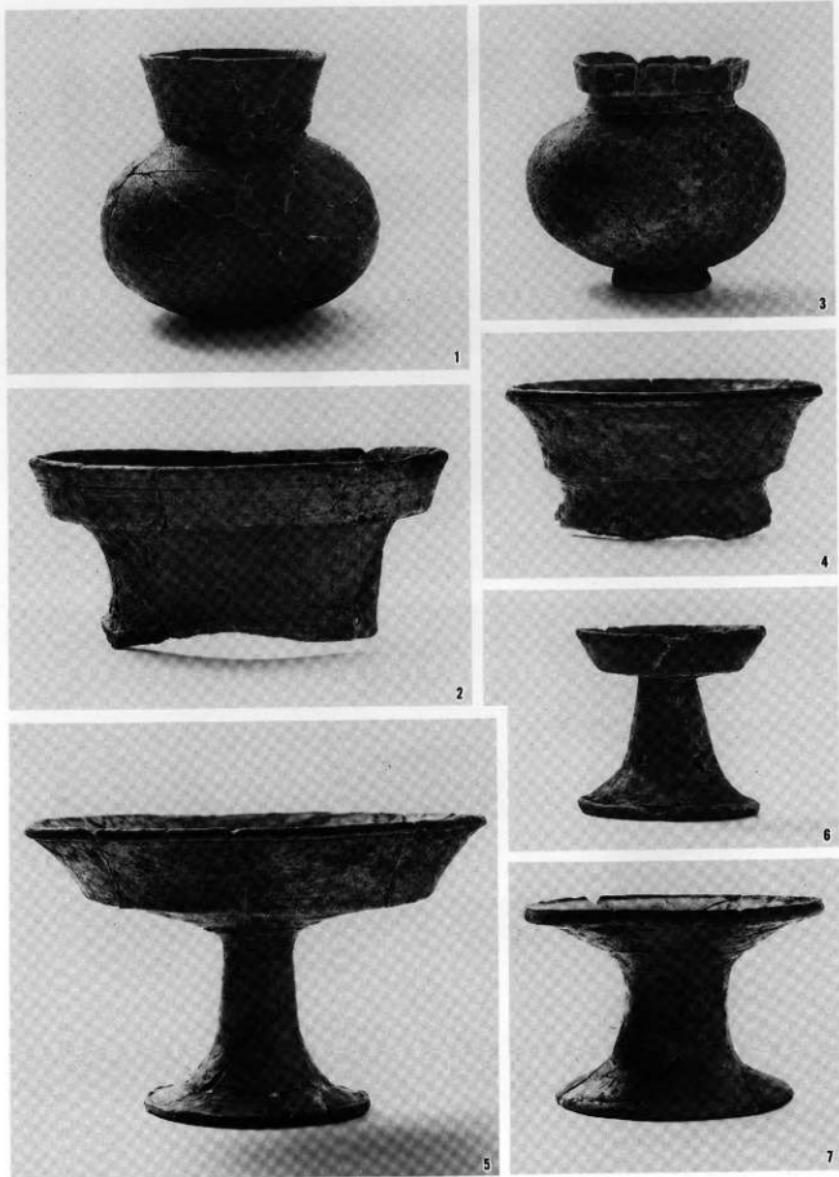


2

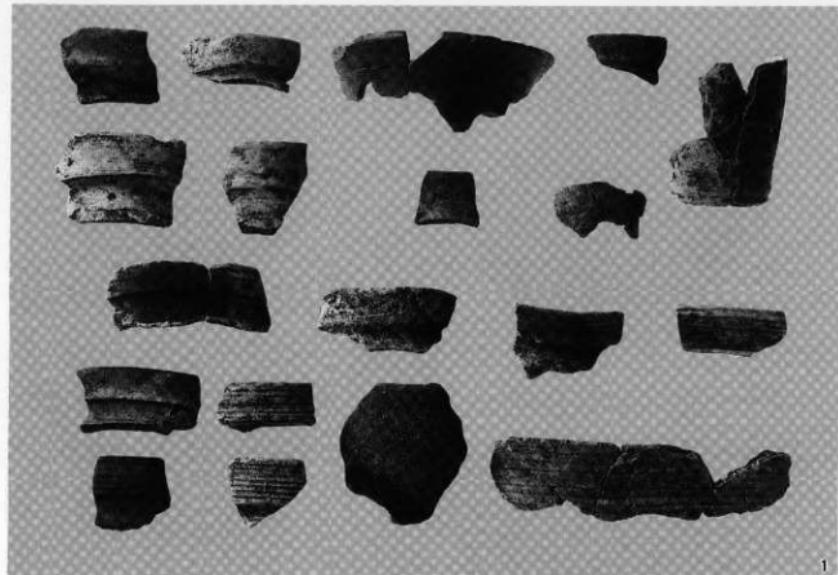


3

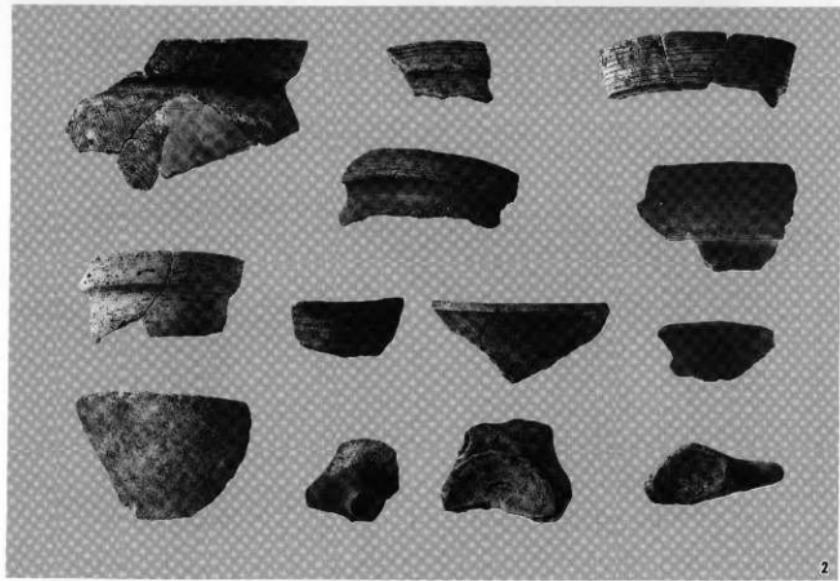
図版16 表探遺物（石器は1/2、他は1/3） 1. 西井龍儀氏採集蔵 2. 亀田正夫氏採集蔵  
3. 平成6年4月分布調査採集



図版17 A地区の遺物 (1/2.5) 2は住02、他は住04・11



1



2

図版18 A地区の遺物 (1/3)

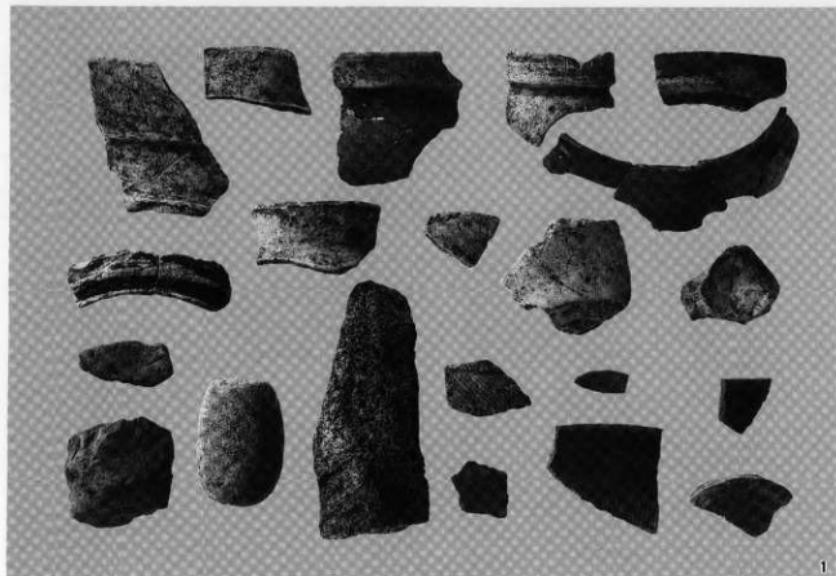


1

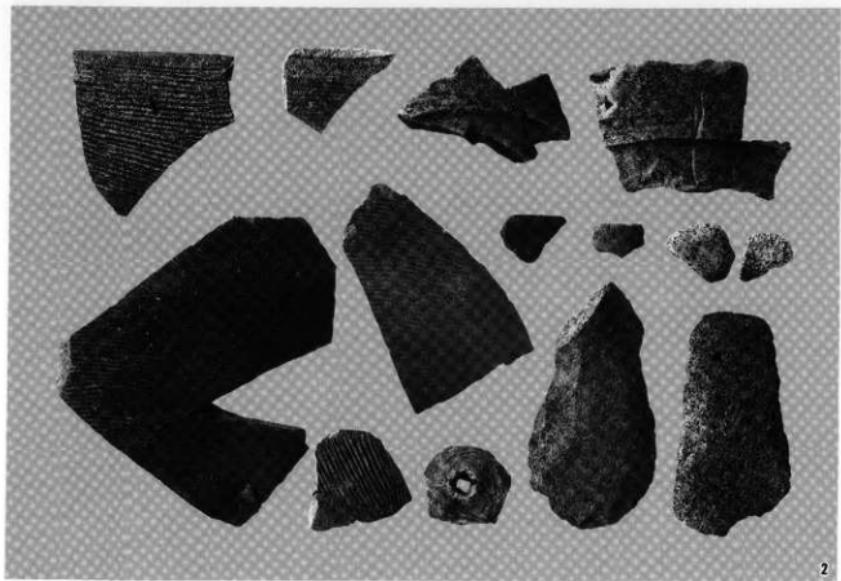


2

図版19 A地区の遺物 (1/3)



1



2

図版20 B・C地区の遺物 (1/3) 1. B地区 2. C地区 (伝) 行人塚

## 付資料 1

富山考古学会刊行「大境 6 号」収録

### 呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期 の遺跡について

西井龍儀  
藤田富士夫

#### はじめに

呉羽山丘陵は富山県のほぼ中央部にあり、県下を呉東・呉西に二分するかたちで存在している。この周辺は地形的に恵まれ、早くから人類の足跡を残しているが、地域的にみてもまとまった文化圏を形成していたようである。ことに丘陵南部における古墳時代初期の新知見は、従来の空白部分を補充し、他地域との関連についても重要な問題を提起している。<sup>①</sup>

一方、この地域は富山市郊外にあり、高岡市にも近いため開発が特に著しい。格好な台地や丘陵は宅地化が進み、開発の核となる公共施設が集中する傾向にある。前述した丘陵南部の遺跡も、北陸自動車道や国立富山医科大学など、こうした開発行為に連絡して調査されて明らかになったもので、開発と遺跡の発見という皮肉な取合せはここでも指摘される。このような状況の中で調査された遺跡は、昭和40年の番神山横穴群以来毎年その数がふえてきている。その結果、古墳時代や縄文時代の豊富な資料と共に、この地域では今まで殆んど明らかではなかった、先土器・縄文時代草創期の遺跡がかなり分布することがわかつてきただ。これらの遺跡は調査の行われた地域に集中しており、将来調査が進めばさらに各地で発見される可能性はあるが、現段階においても、遺跡の立地や、内容など地域的な特色が伺われる。資料の一部は既に紹介されているものもあるが、ここでは呉羽山丘陵周辺全域にわたって、従来から知られていた資料に最近の調査によるものを加え、その内容を紹介すると共に今後の地域的研究の足がかりとしたい。

なお、これらの資料をまとめるにあたり、小島俊彰・橋本正・青江清行・上野章・亀田正夫・小島幸雄・山内賀一・吉久登・富山市教育委員会の各位には多大な御協力、御教示をいただいた。記して感謝の意を表すものである。

#### 1 遺跡と遺物

##### 1. 千坊山遺跡

###### 遺跡の概要

井田川と山田川が合流するところの西側には丘陵性の河成段丘が南北に拡がっている。その最南端にある独立丘陵が千坊山遺跡で、婦中町羽根字千坊山地内にある。標高は約45~50mで、この丘陵の南側半分は既に土取りにより消滅している。土取り部分の露頭では人頭大の礫を含むクサリの少ない疊層の発達がみられ、この丘陵の基盤となっている。疊層は部分的にレンズ状に粘土層を挟むところがあるが、井田川水系による堆積と考えられ洪積世では最も新しい疊層とされている。

昭和49年に行われた分布調査では丘陵全体に古墳時代の住居跡がかなり濃密に分布することがわかつてきただが、先土器時代及び縄文時代の遺物は主として丘陵頂部からその西側及び北側にかけての緩斜面に散布がみられる。

## 遺物

遺物としては古墳時代の土師器をはじめ縄文時代草創期及び先土器時代の石器がある。これらはいずれも表探によるもので、このほか縄文時代前期に多い弦状耳飾りや、磨製石斧破片等も若干発見されているが、土器は未発見である。

## 石器

ナイフ形石器（第4図1）光沢のある流紋岩製で、薄身な縦長剣片の打面側を石器の先端とし、剣片の打面及び先端部を斜めに分断したあとそれぞれ刃溝をしているもので、左側辺上部は分断したままで刃溝しが及んでいない。刃部は石器長さの約3%を占め、裏面の先端から中央部にかけ押圧剝離状の浅い剝離が連続するがこれは加工によるものではなく、石器の使用によってできたものであろう。形状が類似するものとしては人母シモヤマ遺跡（西井 1968）があり、編年的には富山県第II期C〔楠本 1975A〕に位置づけられる。

エンドスクレーパー（第4図2）チャート製で、節理面を打面とした剣片の周縁を細かく加工しており、打面が大きく、刃部が先細まりとなる。加工角度も鋭角であり、草創期のものであろう。

尖頭器（第4図3）2点ありいずれも両端を欠損している。図示したものは両側縁が対称とならず、半月形になるのかもしれない。身幅に比べ極めて器厚が薄く仕上げられている。流紋岩質である。他の1点は安山岩製で、表面がかなり風化している。

有舌尖頭器（第4図20）チャート製で、有舌尖頭器のかえし部分の破片である。小破片で器形は把握しにくいかおおよそ図示したように柳又型に近い形になると思われる。

ビエス・エスキュー（第4図4～19）千坊山遺跡では最も多く発見されている石器である。石材は21点のうち、チャート（8）、ハリ賀安山岩（5）、鉄石英（5）、黒曜石（2）、硬質頁岩（1）と種類が豊富である。形状としては比較的小形で、長辺が3cmをこえるものではなく、2cm前後が最も多い。中には10のように1cmに満たない小さなものも含まれている。これには後で述べる削片（スポール）的なものも含めて扱ったことにもよるが、総じて小さめである。素材としては縦長あるいは不整形な剣片を用いており、碁石遺跡〔岸沢他1974〕で分類されたII類に殆んど包括される。これらを整理すると次のようになる。

- 剣片を長軸に対して横方向から槽状剝離により分割したあと、その打面周辺を片面から加工したもの（4～6）。
- 剣片の相対する側辺あるいは相接する縁に片面及び両面加工をしたあと槽状剝離を施すもの（7～9、12～16）。
- a) タイプの石器、あるいは両面加工した石器を分割したあと、その剝離面（分割面）に直角に槽状剝離を施すもの（11）。
- 剣片の相対する側辺あるいは相接する縁に片面及び両面加工したもの（17、18）。

こうしてみるとb）として分類したものが最も多くを占め本遺跡における主体的な形状といえるが、この中には槽状剝離が狭い間隔を置いて同一方向、あるいは相対する方向から連続して加えられ、削片状になるもの（12～16）があり、ことに12、13は器面に対し横からほぼ直角に剝離し、14～16はかなり平行に近い角度で剝離している。また14、16は剝離したあとさらに加工している。

c）としたものは他にも類品が1点あり、彫刻刀として区別できるかもしれないが、11の側面でわかるように隣接する槽状剝離面が対応し、それと平行する小さな槽状剝離があることや、他のa) b) 各個体の槽状剝離面についても詳細に見るとフィッシャーが打面の反対側で1点に集束する傾向のものかなりあり、そこに小さなバルブをもつものがあることなどから、いわゆる両極（パイ・ポーラー）技法に近い状態で槽状剝離<sup>⑨</sup>されたとみられる。従って11も他のビエス・エスキューと共通の制作状況にあったとみなし、ビエス・エスキ

ーユとしたわけである。

またd)としたものは、ピエス・エスキューが縦状剥離のあるものを前提とすれば、これはその加工前段階の母材（プランク）ということになる。ただ前述のように、縦状剥離されたあとに加工のあるものや、削片状のものにおける縦状剥離の方向及び角度のばらつきなどから、縦状剥離面にその石器の機能部位を求めるより、縁辺に調整加工された部分にあると考えたい。従って17、18については、母材でありながらもピエス・エスキューとしての機能を備えており、これが要求される機能に応じて、あるいは使用されながら、分割されていくものと思われる。

石鎚（第4図21～29）表採数は17点以上でありハリ質安山岩が最も多く使われている。23～29がこの石材で、次いでチャート、黒曜石、玉髓、安山岩等がある。21は安山岩製で、半分以上を欠損しているが、復原すれば長さが4cmをこえる大形の石鎚となる。小瀬ヶ沢洞窟〔中村 1960〕に類例がある。県下では、直坂II遺跡〔橋本 1976〕で散点発見されており草創期のものと考えられている。22～28、いわゆる円脚鎚〔藤森 1965〕に類似するところがあり、23～25は兼形鎚にも近いが、押型文土器に伴なうものは脚部が角ばったり、鋭角になるに比べ、これらはいずれも内側にカーブしているので区別できる。また26～28は抉りが浅く脚がわずかに区別できる程度のものであるが、前記のものと類似するところが多い。円脚鎚は長脚鎚と共に曾根湖底遺跡に顕著であるが、小瀬ヶ沢洞窟や、枕ノ湖遺跡下層〔原・紅村 1958〕にもあり、草創期の爪形文と伴出するらしい。県下では桜井遺跡に当例と似るものがあり、円脚に近い形のものは繩文時代中期後葉にも盛行するが、脚部や、抉り込みの形状は草創期のものと若干相異する。29は菱形のもので、このほか石鎚には、二等辺三角形で抉りのある一般的な形状のものや、縦に割れたもの等がある。

#### 長沢発見の尖頭器（第4図30）

早川コレクションにあり、長沢発見となっているが、長沢は千坊山遺跡に隣接する地名であり、千坊山周辺で発見された可能性が強い。頁岩製で細身の長大な尖頭器である。草創期のものと考えられる。（最近の藤田調査で、千坊山出土品であることがほぼ確認された。）

#### まとめ

千坊山遺跡には先土器時代のナイフ形石器とそれに伴なうとみられる剝片が若干あるが主体をなすのは繩文時代草創期の石器である。まだ土器が発見されていないので草創期のどこに位置づけられるか明らかではないが、遺物の散布範囲の偏りや、使用石材の共通性等から、各器種の石器は同時期あるいは近接した時期のものとして考えられる。有舌尖頭器の破片が1点あり、その消長からすれば下限もある程度想定できるが、反面しっかりとした石鎚が多くあり、その大半が円脚鎚と似る形をとることから爪形文との関連が予想される。一方この遺跡で量的にも多く、バラエティのあるピエス・エスキューも特徴的である。ピエス・エスキューは先土器時代から繩文時代早期までかなり時期幅をもつ石器であるが、ここでは石鎚と併存することは確実であり、小形のものが多く、その機能を示唆している。ただこれらの資料は全て表採によるもので、正鶴を欠いており、将来の学術的調査に待つところが多い。

註① 昭和49年に富山市教育委員会により、杉谷地内の遺跡が調査され、多くの初期古墳が発見された。このうちの一部は島根県など山陰地方との関連が予想されている。（藤田 1974）。

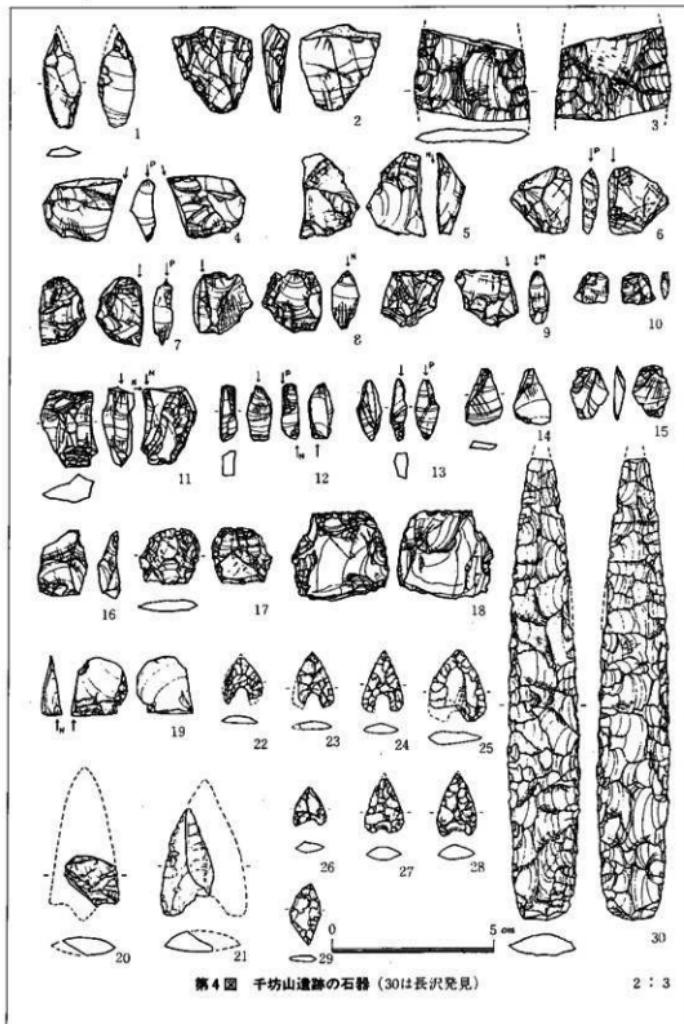
註② 基石遺跡ではピエス・エスキューの製作の際台石と敲石によるバイ・ボーラー技法が用いられたとしている。

#### 参考文献

セ 芹沢長介他 1974 『碁石遺跡』大船渡市教育委員会社教シリーズ第17集

ナ 中村春三郎 1960 『小瀬ヶ沢洞窟』長岡市立科学博物館研究調査報告第3冊

- 西井龍儀 1968 「人母シモヤマ遺跡の石器群について」大境 4 号  
 ハ 橋本 正 1976 「富山県大沢野町直坂 II 遺跡発掘調査概要」富山県教育委員会  
 原寛・紅村弘 1958 「岐阜県花ノ湖遺跡略報」石器時代 5  
 藤森栄一 1965 「旧石器の狩人」



第4図 千坊山遺跡の石器 (30は長沢見見)

2 : 3

## 付資料 2

富山県〔立山博物館〕刊行

「解説図録 古絵図は語る一立山・イメージとそのカタチ」収録

### ——絵図のバリエーション——

## 「長沢諸事集覽之図」について

高瀬 保

(一) 婦負郡婦中町長沢320番地の若林宰家は、六治古物語など「肯柳泉述錄」に収録された伝説でも知られた旧家である。同家の庭中の御印堂に伝蔵されてきた古文書を、過日婦中古文書会の方々と「若林宰家文書目録」に整理した。この作業によっていくつもの新しい知見を得たが、その一つは、「南闇浮提諸國集覽之圖写」と、天正年中迄のことを記した「長沢絵図」(以後「長沢諸事集覽之図」とする)の発見である。

前者の「南闇浮提諸國集覽之図」は、延享元年(1744)に江戸の花坊兵蔵が出版した世界図であるが、その原図は勝浦郡植生村出身の華嚴宗の学僧鳳源(1654~1728)が宝永7年(1710)に出版した「南瞻部洲万国掌葉之図」であって、それを簡略にし地名をかな書きに改めたものである。それは凡例に「夫、南闇浮提とはしゅみせんの南の方を言也、其南闇浮提に大國十六あり、中国五百有、小国十千あり、粟敷国は無量なり」と記し、大小無数の国々を図で示そうとしたものである。同図の中心には大雪山が聳え、その麓にあゝた池があり、その南に東西南北に分けた五天竺がある。インドの東に中国が北京・山東など17省に分けられ、北方に万里の長城がある。ダクターン、朝鮮も書かれている。天竺・中国の南方洋上にシュリナコク、シャム、カボチャ、シャカカラ、ロソン、タイワン、りうきゅうなどがある。中国の東方に日本國、四国、九州、アハジ、マツマエ、サド、オキ、ツシマ、イキ、種ガ島などがあり、エゾも北方に大陸として書かれている。インドの西方は大洋でアフリカ大陸ではなく、とるこ、いたりや、阿蘭陀、いんげれす、いすらんてやなど、ヨーロッパ諸国が粟敷辺土の小島としてではあるが、記されている。「南闇浮提諸國集覽之図」は東洋を中心とした天竺図であるが、西洋世界の新知識を吸収し、一般的な世界図への志向がみられる絵図である。

(二) 後者について述べよう。後者の舞台である婦中町長沢周辺には国指定史跡王塚古墳、県指定の勅使塚をはじめ、大小の古墳・塚があり、北比叡山と呼ばれた天台宗各願寺があり、また中世期に神保氏が拠った富崎城があり、越中の政治・文化史上極めて重要な地

区である。「長沢諸事集覽之図」はその右上隅に「天正年中迄のことを記」と書いてあるよう、同地区の天正以前の歴史を象徴的に図示した絵図である。同絵図は上・中・下三段に分け書かれている。上段には右から一品親王(各願寺開山)塚、勅使塚、五ツツヅラ塚(七人づつの塚で、註記は「人三五人ウブム」)、椿と大手門を備え石垣上に聳える城(富崎城であろう)がある。塚、城の間は寺号谷、清水とハス池、白かけ清水と龍脊川で分かれている。中段には長沢町から同新町に至る道路があり、各願寺が道路に面し山門・戸戸・鳥居・矢来竹垣をあしらい、駿迎堂・根本中室・別当社・カイタン室(開山力)・観音堂・講堂・ニナイ堂・大日堂・成シ院・武藏坊・フド院などと、大桜・塚・薬師カクシ穴などが書かれている。各願寺の前方、道路を隔て右から左に向大条院・堂千坊・牛頭天王・天児六郎屋敷(註記「天児六郎元城カコイ之内」)、八幡宮などが書かれている。各願寺の左は龍脊川を越えて宮治命塚(註記「今ハ若宮稻荷」)と同拜殿、蓮池と蓮花寺、神保安芸守の塚とハラ切石がある。下段は右方から、下長沢町・下村の人家と田地、ツルガ城があり、続いて山岸・羽根村と田屋・山田権太夫の家がある。またカゲ用水と字カゲの田地、一町八反がある。龍脊川を越え、長沢町は山町、中町と庄司町、出町の二筋の道路に沿う家並と、その間に源訪明神が書かれて中町に高札場、山町端の龍脊川派に御米藏がある。さらに左方には富崎城、墨桜、本覚寺、地蔵坊などがある。

「長沢諸事集覽之図」の下段が人々の生活の場の町と村。中段がかつて栄えた各願寺や天児六郎、宮治命塚、神保安芸守最後の場と塚など説話の世界。上段が巨大な古墳と塚の天空に聳えた富崎城をあしらう壁界を象徴的に示している。そしてこの三界を河川、道路で結び関係づけられている。

二つの絵図は、一見して絵心のある教養ある人が丁寧に細心の注意力を注ぎ書き上げたものであることが明らかである。

(三) この二つの図「南闇浮提諸國集覽之図」と「長

「沢諸事集覽之図」は、誰が書き、何か関係があるのであろうか。

若林家古文書典籍の中に仏教関係書が若干あり、そのうちの真宗授要編、真宗安心消息序には、「天児堂若林市兵衛」と記されていて、同人が貰い入れたものであることがわかる。また閑流算法書が20冊ある。そのうち「閑流開平開口伝之巻」と「閑流算法秘伝書」は一本に合綴されていて、その表紙端に「中田先生文化十三年七月吉日写之」とある。「閑流算法算術求解」前編・後編「還源」上巻十一、十二、十三も合綴され、長沢村天児堂と書かれ、また「算法縦込」にも長沢村天児堂と書かれている。これから若林市兵衛は天児堂と号し、中田先生に閑流和算を学んだことがわかる。ここでいう中田先生とは中田高寛先生のことには違いない。高寛（1739～1802）は富山藩士中田高清の子で算術が得意であった。富山六代藩主前田利興はその才能に驚き、安永2年（1773）參覲の折に江戸に併ない、閑流和算三伝の山路主住に入門させた。高寛は安永8年に奥義をも学び帰郷、桃井町で学塾を開いた。遠く伊勢国や、大聖寺、高山などから門人が集まり、富山は閑流和算の中心となった。射水郡高木村石黒信由も門人の一人であった。

「若林氏系図」に、「(前略) 三十五代喜兵衛、元和年間小松微妙院様ヨリ山田川役御朱印拜領。三十六代市兵衛、万治年間將軍家綱ノ時代。三十七代五左衛門、正徳年間將軍家宣ノ時代。三十八代孫七、寛延年間將軍家重ノ時代。三十九代市兵衛、安永年間將軍家治ノ時代。四十代孫七、文化年間將軍家齊ノ時代。四十一代市兵衛、天保年間將軍家齊ノ時代。(下略) とある。これから前述の市兵衛・天児堂は39代市兵衛のこととなる。39代市兵衛は富山の中田塾に入門し和算を学び、かつ高寛が江戸で郷土の先達が関係したというので購入し持参した「南闇浮提諸國集覽之図」の幾度もお頬の上、借用し、筆写したのであろう。(なお高寛の没年は享和2年（1802）であるので、前述の表紙端書の「文化13年7月吉日写之」とあるのとは年月が合わ

ぬのは、若き日の和算筆写本が汚損したものを淨写し直したその日を記したものであろう。)

市兵衛は、安永2年に江戸絵図筆写したのをはじめ、加賀国江沼郡大寺町領絵図2枚、能登国絵図2枚を筆写し、「天児等所持」と図面に記している。和算は規矩術・測量術に通じ、地図に関係する。市兵衛は実直な学徒であったことがわかる。

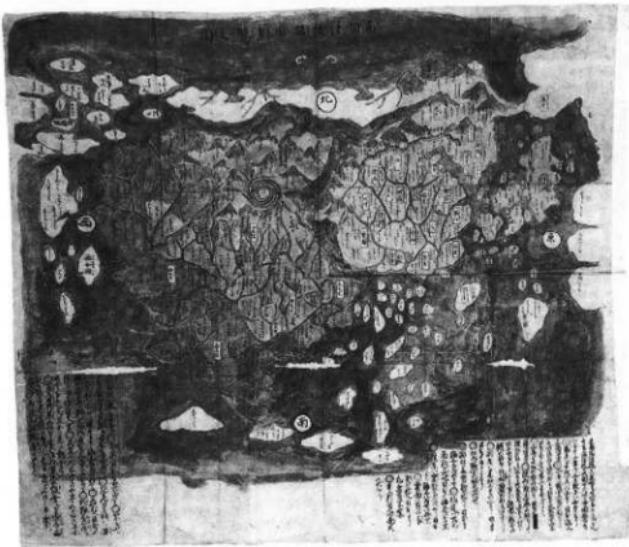
また市兵衛の手で若林家先祖をも記した「肯構泉達錄」の貞治古・六治古の事跡が幾組も抜書されており、享和3年正月に「山田川御役銀二付、古来ヨリ有来候書体共汚損二付、此度相改写置帳」が作られている。文化元年5月に「御分国以来留書写」が作られ、文化9年正月に「三州旧跡俚談」が写されている。市兵衛は老年になってからも若林家のこと、長沢のことには深い関心を持ち、つぶさに調査を続けたことがわかる。

市兵衛は最晩年、若き日に筆写した「南闇浮提諸國集覽之図写」を書斎に飾り眺めながら、我が仏教觀をもとに、長い間調査し続けた長沢のことを、同じように、1枚の集覽図にまとめたいとしきりに考えるようになっていた。そして、一念発起して構想をねり直し「長沢諸事集覽之図」を書き続けていった。下図は何回も書き替えられての淨書であったが、書き足し、気に合わない所は白紙を上に貼り書き改められ、成ったのが「長沢集覽之図」となったのであろう。

立山博物館では開館以後、立山曼荼羅を中心テーマにされ、当時の人々が立山に対し抱いたイメージの抽出に努めてこられた。今回はさらに曼荼羅要素の抽出、登拝図・国絵図から曼荼羅への模式化を追求された。

神通川・常願寺川をこえ、東天に聳える立山と対した長沢村市兵衛は、若き日に「南闇浮提諸國集覽之図」を模写し、晩年に「長沢諸事集覽之図」を書き上げた。それは曼荼羅図そのものである。よってその事実を、写真を副えて参考に報告することにした。

(前富山市郷土博物館長)



南闇浮提諸国集覽之図写



長沢絵図

報告書抄録

ふりがな	せんぼうやま いせき							
書名	千坊山遺跡(1)							
シリーズ名	遺跡発掘事前総合調査事業に係る埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	(1)							
編集者名	片岡英子 神保孝造							
編集機関	婦中町教育委員会 富山県埋蔵文化センター							
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111 〒930-01 富山県富山市茶屋町206-3 TEL 0764-34-2814							
発行機関	婦中町教育委員会							
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
千坊山遺跡	富山県婦負郡 婦中町長沢 字千坊5858 外	市町村	遺跡番号	36°39'06"	137°07'39"	940422 ~941222	72,000 発掘面積 6,080	遺跡発掘 事前総合 調査事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
千坊山遺跡	集落 散布地	繩文 弥生 中世	堅穴住居跡（弥生） 土坑 溝 塚（中世）	繩文土器 石器 弥生土器 須恵器 中世土師器 珠洲焼				